

テンゴ  
「象の鼻は長い」か？

——スワヒリ語の「総主論」序説——

小 馬 徹

I. スワヒリ語は、従来いわゆる「バンツ語」と呼ばれる250余りの諸言語の一つとして扱われてきた。「バンツ語」の名称は、「人」を表わす単語複数形の祖語再建形として想定された \*bantu に因むものだが、その研究は、コンゴ（ザイール）地域では16世紀に、南アフリカでは1860年代に始まり、東アフリカ地域での研究がそれに次ぐ。

現在世界的に広く支持を受けている J. H. Greenberg によるアフリカ語の言語分類は、'genetic classification of the languages of Africa' と称し、地理・文化・人種関係等、全ての非言語的要素を排して、言語的発生の系譜関係のみに依拠するものだが、彼に拠れば、「バンツ語」の多くは、ニジェール・コルドファン語族、ニジェール・コンゴ語派、バヌエ・コンゴ諸語に属するものうち、主として赤道以南に存在する諸言語の「通称」とでもなり、正式の分類カテゴリーたり得ないのである<sup>(1)</sup>。

ニジェール・コルドファン語族に共通な特徴としては、ほぼ次のものが挙げられる。

- a) 名詞に多数のクラスが存在し、
- b) それらは、多くの場合、単数・複数の対をなし、
- c) 各品詞は、クラスに応じて、徹底した一致 (concord) の現象を示す。
- d) 動詞の複雑な派生形が卓越するが、それらは、動詞語幹に様々な接辞を付加することによって得られる。
- e) 声調言語 (tone language) である<sup>(2)</sup>。

但し、これらの諸点は、古くからバンツ語の特徴として挙げられてきたも

のと軌を一にしている。

スワヒリ語は、以前からその形成にアラビア語の影響が大きく与っているとされてきたが、専ら「基礎語彙」の異同を論拠とするものであった。然しながら、同時に、上記 a), b) 及び c) の点では、バンツ語の特徴、殊に統語法を理解するための格好の例として取り扱われることが多く、又それが指示されて来た<sup>(3)</sup>。

他方、スワヒリ語——特に「部族スワヒリ語」(Tribal Swahili)<sup>(4)</sup>など「アングロ化」されていないネイティブな「海岸スワヒリ語」(Coast Swahili)<sup>(5)</sup>——の統語法には、クラスと接辞による一致現象から逸脱する言語現象、及びそうした一致に拠らない言語現象が少なからず見うけられることが、守野庸雄によって早くから認識されてきた。だがこの点は、欧米の研究書のみならず、最近タンザニア、ケニアを中心に盛んになりつつあるアフリカ人自身によるスワヒリ語研究でも殆んど顧みられていない。

この小論は、守野に従って、欧米の比較言語学の伝統に基づく視角から自由な、新たな視点に基礎を置くスワヒリ語統語法の研究の緒を模索しようとする小さな試みである。

Ⅰ. 日本語学又は国語学史上で久しく論争されてきた、助詞「は」と「が」を巡る「提題論」又は「総主(語)論」は、その対象とする構文を、象徴的に、「象は鼻が長い」によって代表させている。ところで、スワヒリ語にもこれによく対置し得る構文があることに気が付き、“*Tembo mkonga wake (ni) mrefu*” (「象<sup>アンボ</sup>は鼻が長い」) 構文として提起しているのは、守野の『スワヒリ語言法』が最初であり、最後である。同構文に触れた守野の文章は長くないので、以下に全文引用する<sup>(6)</sup>。

《主語と副語》——(1) 象ハ鼻ガ長イ

スワヒリ語では日本語と同様、極く一般的な表現様式である。主語を《Z》、副語を《z》とする。

- 1) Tembo mkonga wake mrefu. 「象は鼻が長い。」  
           Z                  z

- 2)
- Mimi jina langu Muhamed Ali.

Z z

「私の名前はモハメッド・アリです。」

- 3)
- Mtoto huyu baba yake anaitwaje ?

Z z

「この子のお父さんの名前は何か。」

- 4)
- Mtoto mdogo jino hutoka wenyewe.

Z z

「小さい子は歯が自然に抜けるものです。」

- 5)
- 'Kuoā' kinyume chake (ni) 'kuolewa'.

Z z

「結婚する」の反対は「結婚される」です。」

- 6)
- Wale watu njia yao (ni) moja.

Z z

「あの人達は同じ方向に行くんです。」

- 7)
- Figili hii fungu moja kiasi gani ?

Z z

「この大根は一山幾らですか。」

Ⅲ. さて、日本語の「提題論」は、I. Todoriguez, (Art de Lingoa de Iapan, Nagasaqui, 1604—1608) を嚆矢とし、最近では三上章の一連の著作に至る迄、日本語研究に常に豊饒な問題を提起してきた。

そこで、先づ守野のスワヒリ語研究に於る問題提起が、具体的に日本語の「提題論」と如何なる関わりを持ち得るかを検討しよう。

最初に、日本語研究に於る「提題論」を、「は」という助詞が、「が」と異なり、文の題目或いは主題を提示する働きをもつ、とする主張に関わる議論として一応整理し、その「提題論」の展開を概観してみよう。

I. Rodoriguez が、「は」は、「特別の勢と心持とを持った主格であることを示す<sup>(7)</sup>。或いは又、事柄を指示したり提示したりする」(Rodoriguez, *op. cit.*, 一四九丁裏) と、既に言っているが<sup>(8)</sup>、19世紀以降にはもっと注目に値する見解が現われる。S. R. Brown (Colloquial Japanese, Shamghai, 1863) は、「は」が、「ABなり」という文脈から、「Aは」と、Aを取り出して、後続す

るBから分離し、表現の主題とすると述べる<sup>(9)</sup>。この「は」の「分離」又は「孤立化」機能説は、J. J. Hoffman (J. H. D. Curtius, Prove Entre Japanese Sprak-kunst, Leyden, 1857. への補筆, 及び J. J. Hoffman, Japansche spraakleer, Leyden, 1868.), B. H. Chamberlain, A Handbook of Colloquial Japanese, London, Tokyo, 1888.) 等によっても支持されている<sup>(10)</sup>。

さて、これら西欧人の、表現効果に主として視座を置いた「提題論」とは異なり、19世紀にそれとは独立的に発生して来る日本人学者による、主に文法に視点を向けた「提題論」を併せて考察すると、スワヒリ語に於る「提題論」への視野が開けて来る。

草野清民は、日本語には、文主(主語)の他に「仮文主」、「離隔文主」があるとする(「大槻氏の広日本文典を讀みて所見を陳ぶ」、『帝国文学』、三巻六、1897年)<sup>(11)</sup>。仮文主とは、「東京の都は面積広し。」や、「東京の都は人口多し。」という文中で、「は」という助詞と直接結合している成分、「離隔文主」とは、「飛鳥川、昨日の淵ぞ今日は瀬となる。」や、「人、恒の産なきときは恒の心なし。」という文中の「飛鳥川」、「人」など、助詞と結合していないが、「仮文主」と同地位の成分である(同書102頁)<sup>(12)</sup>。草野は、一文中の主語と述語は夫々一つづつという立場をとるので、「仮文主」、「離隔文主」を単なる修飾語の類とするのだが、「離隔文主」が全く独立の要素に見えながら、「仮文主」と同様に、一文の「総括的の主」であることを認める<sup>(13)</sup>。

草野による、この文法論・構文論的な視点から、「提題性」が助詞「は」の働きによるばかりでなく、文の統語上の位置関係にも起因することを理解するならば、「提題論」又は「総主論」は、日本語研究上の「は・が論」を離れて、たとえば今問題となっているスワヒリ語の「Tembo 構文」などにも十分適用可能な理論仮説となる可能性を見出すことができる。

即ち、“Tembo mkonga wake mrefu.”では、mkonga wake (その鼻)が述部(predicate)たる(ni) mrefu ([は]長い)の主語であるが、Temboは、mkonga wake (ni) mrefu の部分全体を総括して支配する「総主」と見る仮説を立てることが可能になる。

ところが、この仮説を考察するためには、日本語に於る「は・が論」に再度

フィード・バックすることが有効だと思われる。

西欧の日本語研究者の中でも、W. Imbrie は、B. H. Chamberlain らの方向で研究を進めながら、「提題性」の表現心理性の側面を或る程度迄明確にしている<sup>(14)</sup>。彼によれば、「は・が」問題は、結局主語と述語の問題であり、文の表現の重点が主語にある場合には「が」が、述語にある場合には「は」が用いられる。即ち、主語と述語は、常に「が」によって connect され、「は」によって separate される (Imbrie, op. cit., p. p. 1—2.)<sup>(15)</sup>。

この Imbrie の説には、2つの重要な指摘がある。その第1は、「は」の働きが主部・述部の二分と、それに伴う結果としての「提題性」にあるとする見解である。これは、「提題性」を単なる分離によるものとする考え方を遙かに前進させている。第2は、「が」が主述の結合に、「は」が主述の分離に関わるとする見解である。

第1点は、既に述べた通り、「は」が不在であっても文構成要素相互の統語的位置関係によって「提題性」が達成され得るとする考え方を可能にし、スワヒリ語の「総主構文」を考えるに当たっても、その理解を一層深く促すことにもなる筈である。

第2の主述関係の側面をスワヒリ語に則して考えてみよう。先に挙げた守野の例文3)では、総主と主語が、実際の一致関係に於ては、共に生物の単数のクラス（パンツー語のクラス分類に於る第1部類）型の一致をするために、動詞が総主又は主語のいずれと一致しているのか明確に決定できないのだが、このパターンに属する他の文の多く、例えば、“Neno hili asili yake inatokana na kiarabu.”（この単語はアラビア語から出ています。）などの文では、主語 asili（守野の「副語」）と動詞 kutokana の間に一致があり、総主 neno（守野の「主語」）との間には一致が見られない。

他方、動詞構文ではなく、顕在的、潜在的等辞（copula）構文であり、一致の有無は、例えば2)の如く必ずしも問題にならないことがある。然しこの構文も現在以外の時制——又はアスペクト——に移せば、等辞 ni は動詞 kuwa に置き換って動詞構文となって、上述のものと同じ一致・非一致関係が現われる。

そこで、このように表現性の側面を離れて、文章のもう一つの側面である格関係から見れば、「は」による分離と「が」による結合の見地を媒介にして、スワヒリ語の「総主構文」を“分離=non-cordance : 結合 = concordance”の観点から検討することが、ひとまず、着想され得るであろう。

Ⅳ. 守野が、「Tembo 構文」を「象構文」になぞらえながら、それ自体をどのような性質の構文として規定しているかを次に検討する。

比較すると、守野が同構文の文例として挙げている7つの文章には、「提題性」以外にも或る共通性があることが判る。即ち、守野はこの構文のいわゆる「総主」を「主語」(《Z》)、いわゆる「主語」を「副語」(《z》)とするのだが、その全ての文例で、「副語」が意味上「主語」の部分に略々なっていると言える。換言すれば、守野の「Tembo 構文」は、「主語」と「副語」とが「全体・部分関係」と言って良い関係にあるものにほぼ限られていると言えるだろう。

これを実際の例に従って眺めてみる。

Z	z
1) tembo (象)	mkonga wake (その鼻)
2) mimi (私)	jina langu (その名前)
3) mtoto huyu (この子供)	baba yake (その父)
4) mtoto mdogo (小さな子供)	jino (歯)
5) kuoa (結婚すること)	kinyume chake (その逆)
6) wale watu (あの人達)	njia yao (その行く先)
7) figili hii (この大根)	fungu mofa (一山)

ここで検討を要するのは、果して、スワヒリ語の「総主論」を考えてゆく際に、議論を上述の意味での「全体・部分関係」にある文にはほぼ限定すべきかどうかであろう。

この件を考えるに当たっても、日本語の「提題論」に関する山田孝雄と草野清民の考え方を対比検討して参考にすることができよう。

山田は、本居宣長の『詞の玉の緒』以来の伝統をうけて、「は」を係助詞と

見、文の「陳述」を支配すると考える（『日本文法学概論』、1936年、149頁）<sup>(16)</sup>。「陳述」とは、山田に従いがい、論理学のアナロジーで述べれば、命題に於て、主辞と賓辞（predicate）の概念の異同を明らかにして、双方を適当に結合する作用、と言うことにならうか。

更に山田は、「は」を *copula* として、一旦分解したものを統一すると見るが、文の二部分を統一すると考えるこの見方は、草野の「提結」と親近する。然し、山田は、「——は」という文章成分を特別視せず、それを「係り」が陳述を支配する現象一般の中で見ようとする<sup>(17)</sup>。

山田は又、「象は体大なり。」、「人つく牛をば角を切り。」などの文例を挙げて、「総主」に似た現象が他の側面にも現われるから、「総補」、「総客」などの分類も立て得ると考えている（山田、前掲書、1101—1102頁）<sup>(18)</sup>。そして、主部に限って言えば、「象は」を「主格」、「体」を「副主格」の如く、格関係を文法的に規定する<sup>(19)</sup>。

守野の立場も、「全体・部分関係」を認めただうえで、この主格・副主格にも相当すると言える「主語」、「副語」を設定している点に於て、山田と相通う観点に立っていると考えると良い面があると言えるだろう。

山田は、「全体・部分関係」が認められないものについては、「——は」の部分を飽く迄も主格として扱おうとするので、文の「——は」の剰余部分である付属句に「陳述句」という概念を別に設定し、付属句全体が一つの述格相当として用いられると説明する（山田、前掲書、1093—1094頁）<sup>(20)</sup>。

例えば、「あの人は交際がうまい。」という文では、「交際がうまい」という付属句が「陳述句」とされる結果、「提示語」を持つ点では全く同一である構文が、「象は鼻が長い。」のように「全体・部分関係」があれば、主部が「本来の主格」と「副主格」に分立しているだけで単文であり、「あの人は交際がうまい。」のように「全体・部分関係」のない場合は、述部が内部で更に主、述に分れる「有属文」（複文の一）であるとされて、夫々が全く別の構造を持つとされるに至る<sup>(21)</sup>。

守野も、山田とはそのカテゴリーに幾分ずれがあるものの、やはり「全体・部分関係」を強く意識しているように思われる。それ故か、後述の事例 44 の

ように、もっと「全体・部分関係」が認めにくい用例は、一先ず取り上げていない。

ところで、実は、この「全体・部分関係」をどう規定するかは、かなり微妙な問題であると言わざるを得ない。尾上は、山田が有属文の例として挙げた「あの人は交際がうまい。」について、「交際」を「あの人」に属する能力関係として、「全体・部分関係」のパターンに包接できるとする。更に、同じく「陳述句」を含む有属文の例として山田が引いている「昨日は雹ふりたり。」と「この庭は石燈籠の配置が巧みだ。」は、陳述部の事態とその事態が成立する時空的状况を「は」で結んで句的事態で結合した文（川端善明、「動詞文・格」、『国語国文』、28巻3号、34—35頁）と見ることもできるのに、山田自身がこれを、〔時空状況＋陳述句〕とせず、〔主格＋述格陳述句〕として扱っていること自体が、それらの文と「象は鼻が長い」タイプの文との連続性を示していることになる<sup>(22)</sup>。

実は、この問題をここ迄敷衍して来ると、スワヒリ語についても、問題は copula 自体に迄迫って来ることになる。先程は一先ず留保しておいたが、その点にここで軽く触れてみよう<sup>(23)</sup>。一例を挙げれば、“Mtu ni watu.”（人は〔類的〕人間である。）という文に於て、ni は copula として、mtu と watu とを分離することで且結合し、そのことによって、他の事態から当該事態を特出させる訳であって、それ故、“Mtu (ni)” は、十分に「提題」たり得るのである。

然し、スワヒリ語に於る、より広範囲の「提題性」全般と copula 自体の検討は将来の課題とし、この小論稿では、何らかの形で、今回「Tembo 構文」として検討する構文を特定しておきたい。その限定条件は、今後の発見のための下仕事としての性格をもたせ得るよう、出来るだけ現象の連続性を考究し得るようになりに緩くとり、ほぼ次のようにする。

- 1) 提示部が明確に副（名）詞であると考えられるもの、即ち時空性の提示が明らかなものは一応除外する。
- 2) 総主と主語の「全体・部分関係」のあるか否かは問わない。

但し、中間的、移行的な文例も収録し吟味を加える方が発見的であろう。

V. 上の方針に基いて、出来るだけ多くの「Tembo 構文」の文例を集めることに努めた。然しながら、この構文が「極く一般的な表現様式」であるとす守野の言明にも拘らず<sup>(24)</sup>、実際の収集は必ずしも容易ではなく、これ迄のところでは、先に守野が挙げていた7例を別にすれば、次に掲る40余りの文例を収録し得たに留まる。

- 8) Twiga miguu yake ya mbele mirefu zaidi.  
(キリンは前脚の方が長い。)
- 9) Chui makucha yake makali sana.  
(ヒョウは爪が大変鋭い。)
- 10) Chungu asili yake udongo.  
(壺は土からできている。)
- 11) Yule mbwa kazi yake ile ile.  
(あの犬は同じ事ばかりしている。)
- 12) Nzi ubawa wake mmoja wa heri na wa pili wa shari.  
(蠅は、片方の羽根に福があり、もう一方の羽根に禍がある。)
- 13) Viroboto damu yao najisi vile vile.  
(蚤は血も不浄です。)
- 14) Mtu huyu hatima yake mbaya.  
(こいつは、ろくな死に方をしない。)
- 14') Mtu huyu mwisho wake mbaya.  
(こいつは、ろくな死に方をしない。)
- 15) Mwanzo wa maoteo ya nywele za kichwa mwisho wake kideveni, huo ndio urefu wa uso.  
(髪の毛の生え際から顎迄、これを顔の縦の長さと言う。)
- 16) Mdudu chungu ganda la muwa kwake kivuno.  
(蟻には拾った砂糖黍の皮も大収穫だ。)
- 17) Kupanda mchongoma, kushuka ngoma.

- (刺のある木に登るのは降りが大変だ。)
- 18) Kwa umbo miili yao makubwa lakini woga wao mkubwa zaidi.  
(連中は柄も大きいが、臆病さときたらそれ以上だ。)
- 19) Yule mwanamke kazi yake kukaa kimya huku akiungulika moyoni.  
(妻は傷心を抱いて、唯押し黙っているばかりだった。)
- 20) Nzi fahari yake kufa juu ya kidonda.  
(蠅は、傷口にとまっていて、叩かれて死ぬのは名誉なことだ。)
- 21) Fahali hili kazi yake kupandishwa tu.  
(この雄牛は種付け用だ。)
- 22) Mimi jina langu (ni) Ali.  
(私は名前をアリと言います。)
- 23) Mtoto huyu umri wake ni siku mbili.  
(この子供は産後二日目です。)
- 24) Upawa kazi yake ni kupikia na kupakua.  
(杓文字の用途は、調整と盛付けです。)
- 25) Mtoto wajibu ni kuwaheshimu wazee wake.  
(子供は、両親を敬愛するのが望ましい行ないなのです。)
- 26) Binadamu, asili ya kupewa kinywa kimoja tu, ....., ni alama kubwa ya kuwa asiseme zaidi ya maneno aliyaanbiwa.  
(人間は口を一つしか持っていないが、その由来は、聞いた以上のことを喋るなどという厳しい戒めにあるのです。)
- 27) Kazole bara bara ni maili kumi na mbili, .....  
(カゾレは、行程が12マイルで……)
- 28) Baba yake mama na baba yake baba, wote wawili hawa ni babu zake mtoto.  
(母の父と父の父は、両方とも子供にとっては祖父になります。)
- 29) Wachawi kazi yao hasa ndiyo kuwaroga watu.

(妖術師は、人々を妖術にかけることこそ仕事なのです。)

30) Simba mwenda kimya ndiye alaye nyama.

(ライオンは、黙って歩いているのは肉を食っている奴です。)

31) Mtoto, umleavyo ndivyo akuavyo.

(子供は、丁度育てあげた通りに育つものです。)

32) Uchi wa mwanamume mwanzo kitovuni kwake, mwisho magotini mwake, sehemu hiyo ndio uchi wa mwanamume.

(男の裸とは臍から膝迄で、この部分こそが正に男の裸の部分なのだ。)

33) Ni uchimvi mtoto mchanga kuota meno ya juu kwanza.

(赤ん坊は、上の歯から先に生えて来ると縁起が良くない。)

34) Nguruwe pua yake imepondeka.

(豚の鼻はべちゃんこです。)

35) Kondoo pembe zake zimesongana.

(羊の角は巻いている。)

36) Kisu hiki makali yake hayadumu.

(このナイフは、すぐになまる。)

37) Nyati pembe zake zimepindana.

(野牛の角は曲っている。)

38) Kiboko kinywa chake kimepanuka.

(カバの口は大きく開閉する。)

39) Mto huu ndani yake mna manyoya ya ndege.

(この枕は、内部に鳥の羽毛が詰まっている。)

40) Kondoo manyoya yao hutengenezwa sufi.

(羊は毛を糸に作られる。)

41) Neno hili asili yake inatokana na kiarabu.

(この語は、アラビア語が起源です。)

42) Mimi jina langu naitwa Ali.

(私は名前をアリと呼ばれています。)

- 43) Kucha za mikono na miguu, mtu anatakikana azichokoze,  
azitoe takataka zake.

(手足の爪は、よく掘じくって垢を出しておくのが望ましい。)

- 44) Maarusi wanawake wamepambwa kwa dhahabu kocho kocho!  
kichwani mpake miguuni.

(結婚式は、女達が頭のてっぺんから脚の爪先迄金製の装飾品で装った。)

- 45) Watu hao nyuso zao zilisawijika, ziliumbuka na ziliharibika  
rangi.

(彼等は顔をしかめ、表情をこわばらせ、顔色をなくした。)

- 46) Ulimwengu wa samaki, mkubwa kumla mdogo.

(魚の世界は、大きなものが小さなものを食べる。)

- 47) Mbwa na kila kitu chake……mate yake, manyoya yake, kucha  
zake na kila chake……ni najasi.

(犬はその全て、唾、毛、爪、その一切が不浄のものです。)

- 48) Mimi mke wangu hapati nusu ya unayoyapata wewe.

(私についてなら、妻はお前の半分も得ちゃいないよ。)

「総主」は二重下線で、「主語」は一重の下線で示した。どの文例も、即座にソースを明らかにできるものばかりである<sup>(26)</sup>。

各文例を、最初から順を追って通読すれば、多様なヴァリエントから、様々な中間的・移行的現象を発見することが出来るであろう。その的確な把握と、背後にある論理の解明こそが本研究の究極の目的であるが、現段階では、対象の複雑さと、資料的・時間的制約とから、必ずしも十分に目標を達成し得ていない。然しながら、少なくとも研究の水路付けは用意できたのではあるまいか。

Ⅵ. 本稿では、以下に、検討されるべき問題点を例示的にスケッチするだけに留め、向後それらの課題を総合的に究明して行き度い。

(1) 例文33 迄は、copula 型と言えるものを並べてあるが、それらに於る等辞

性の明示度は、“ $\phi \rightarrow (ni) \rightarrow ni \rightarrow ndi-R$ ”<sup>(26)</sup>の順で強まると言える。もし、ni や ndi-R<sup>(27)</sup>が心理的な表現性により強く関わり、格関係にはそれ程深く関わらず、かなり自由に取捨選択され得るとすれば、守野が「連鎖表現」と呼んで分類した注目すべき文型との親近性を想定してみることはできないであろうか<sup>(28)</sup>。即ち、

ex. 1 Kiti hiki (ni) kikubwa.

Kiti kikubwa kinachezacheza.

Kiti hiki kikubwa kinachezacheza.

ex. 2 Mchele huu, mzuri unabimba sana.

au (or)

Mchele huu mzuri, unabimba sana.

}

この場合、発声や間の取り方の異同に注目を払う必要があるだろう。

- (2) 同じく「連鎖表現」との親近性を考える場合、同構文に於る「一致」と「不一致」(discordance)の問題を、「Tembo 構文」に於る同一の問題と重畳させ得るかも知れない。因みに、前者に於る「一致」の二様を挙げる。

{ ex. 1 Mapenzi ni kikohoji hakiwezi kufichika. (一般型)

{ ex. 2 Mapenzi ni kikohoji hayawezi kufichika.

- (3) 文例49について。これは或る小説の一節であるが、Abdi Faraji Rehani氏によれば、“Watu hao walisawijika nyuso wao……”とする方がもっと一般的な表現法であると言う。すると‘nyuso [zao]’は客辞又は補辞になり、原文に於る「主部」内の「全体・部分関係」を脅かす。

更に、“Vitu vimepanda bei siku hizi.”のような文例との親近性に考えが及ぼう。すると、スワヒリ語には、「主部」に限らず 

全	部
---	---

 → という統語上の傾向を一応想定してみることが可能になろう。これは即座に「総客」, 「総補」の構文の有無の検討を促すであろう。

因みに、三上章は「無題化」と言う独特の書き換えの結果によって「象構文」の再分類を試みているが<sup>(29)</sup>, スワヒリ語でもそれに対応するような有効な何らかの方法が検討されてよいであろう。上に挙げた Abdi 氏による書

き換えの例は示唆的である。

- (4) 文例(27), (44), (46)などは、時空制的事態との結合による文例、即ち副(名)詞の頭置による文例との近さを示す例である。この事實は、スワヒリ語では、多くの場合名詞がそのまま副詞として用いられ得ることと関係するのかも知れない。
- (5) 文例(16), (18)をこの構文に含めるとすれば、本来的には「全体・部分関係」や、述部と格関係に立ち得ない文構成要素が——特に *kwa* や '*kwa*—所有代名詞・などに促されて——この構文に取り込まれていると考えることが可能になるだろう。

これは、三上章が日本語の「提題論」に於て極めて広範囲の用例を収集し、それに基づいて、「述語との間に直接的な格関係をもちえない語が、提示語という表現に卓越した成分ゆえに文の構成に参加できる場合がある<sup>(30)</sup>。」と説いていることを想起させる。

因みに、この三上の説くところは、山田孝雄が指摘した、文の構成の二側面である語間の格関係と(心理的)表現法との間の微妙な関係に触れる重要なものである<sup>(31)</sup>。

- (6) 文例(17)は、守野が「動詞原形」による条件法の文例としても挙げているものであり<sup>(32)</sup>、両構文の親近する側面を示唆する。

又、スワヒリ語では動詞定形による一致に頼らずに、不定形を用いて非一致的に統語する場合も少なくないが、スワヒリ語の不定法の融通性にも注目すべきだろう。

- (7) 「全体・部分関係」からみると例文(43)は、「*Z < z*」となろう。但し、*mtu* (人)は、*kitu* (物)、*malala* (場所) などと同様に、不特定の対象を漠然と指す代名詞として、*mtu* (誰か)、*kitu* (何か)、*mahala* (何処か) の意味で用いられることを考慮する必要がある。
- (8) (4), (7), (25), (27)など、「全体・部分関係」を想定し得る文例でも、主語に所有代名詞又は属辞が伴わず、主語の総主との個別的な「全体・部分関係」が示されない例がある。これをどう考えるべきか。「全体部・分関係」の個別性が自明と考えられているためか、それとも提題の重量による何らかの心理的

な表現効果を考えるべきなのか。

- (9) 例文 42) では、動詞は主語ではなく総主に一致している<sup>(83)</sup>。すると、この例文は、総主による提題性の概念を脅かすだろう。
- (10) 例文33)は、述部が頭置強調された珍しい例だと考えられる。
- (11) 例文32)では、総主が補語として再述されるが、この現象は、総主の提題性を示していると言えるかも知れない。
- (12) 例文47)の‘na’は、守野の言う「虚辞」であり、「文意より文勢やアヤに與かる度合が強く、何かを深よわせる<sup>(84)</sup>」文成分、即ち文章の心理的表現効果の強化に関わるものであるから、構文の基本構造に大きな変化を来さないと見てよい。(cf. VI - (1))

例文 47)でも、ダッシュ内で、‘na’に導かれた主語の再述が見られるが、この場合再述して提示されているのが総主でなく‘na’によって特出されている文成分であることに注意しなければならない。‘na’は「総主構文」という提題的構文に於てもなお独自の提題性を発動している。この双方の提題性の関わりは興味深い問題である。

- (13) 例文28)は、ヘッド・ヘビーな文を救うための言い換えの可能性を考えてよい。
- (14) 総主がいわゆる「主語」でないことを示すために、草野は、総主を文の主語の位置に立てても文意が原文と著しくそぐわないかどうかを調べた(『帝国文学』、五巻五、1899年)が<sup>(85)</sup>、スワヒリ語でも同様な試みの可能性を考えられる。

VII. 更に、本稿執筆のための資料整理の過程で、「Tembo 構文」と様々な局面で関わり、又親近性を持つ文例を数十例収集できた。それらの文例との相互比較・検討を進めれば、「Tembo 構文」の理解も遙かに深化するものと期待される。但し、ここでは、関連する問題を幾つか手短かに素描するに留める。

- (15) 次の各例文では、下線を施した動詞不定形が既に提題性をもっている。

ex. 1 kufa, tutakufa wote.

(死ぬのは、我々皆が死ぬ。)

ex. 2 ...kuoga haogi, sijui kula alikuwa akila.

(……沐浴と言えば、彼は沐浴してないし、食事はどうかと言えば、彼が食べていたかどうか知りません。)

(16) 次の各例文では、文頭にある主語が——提題性を持ち——動詞定形とクラス接辞による一致をせず、不一致 (discord) 現象が見られる。

ex. 1 Ukoo wetu hatuli pweza.

(私達の一族は蝟を食べない。)

ex. 2 Binadamu hatuli pwesa.

(人間は蝟を食べない。)

ex. 3 Binadamu hatuna hila.

(人間〔自体〕には悪意なぞ無い。)

これらの文例は、クラス一致に従えば、いずれも動物の複数クラス (バンツ語の第2部類<sup>クラス</sup>)の接頭辞 ‘wa-’ で一致しなければならないところだが、いずれも人称代名詞、一人称複数の接頭辞 ‘tu-’ と呼応している。Abdi Faraji Rehani 氏によると、‘wa-’ による一致文も勿論可能だが、この場合には、‘tu-’ との呼応による文とは異なり、文の主語から「話者」自身が除かれることになる。

この点にも、文の格 (一致) 関係と表現性の両側面の抵触する面を見出せる。

(17) 動詞の複合時制による構文では、総主と主語との間に、いわば「提示時制」——この場合は ‘wakikuwa’ ——とでも言えるものが挿入される場合がある。

ex. (Wale watu) walikuwa matumbo yanafuka moto kwa njaa.

(〔彼等は〕空腹の余り、腹が燃えるように熱くなっていた。)

尚、これを現在時制の構文に移し変えれば、次の通り「Tembo 構文」になる。

ex'. (Wale watu) matumbo yanafuka moto kwa njaa.

(註)

(1) Greenberg, J. H., The languages of Africa, Bloomington: Indiana Un-

iversity 1966.

- (2) e)については、スワヒリ語はソマリアの一部方言を除いて例外と考えられている。
- (3) 例えば、次のものなど。Alezandre, Pierre, An Introduction to Languages and Language in Africa, London: Heinemann, 1967. Seligman, C. G., Races of Africa, London: Oxford University Press, 1930. 五島忠久, 『アフリカ語の話』, 大学書林, 1963年。
- (4) 守野庸雄, 『スワヒリ語基礎語彙用例集』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, i-iv 頁, 1975年。
- (5) 同書同頁。
- (6) 守野庸雄 (編), 『スワヒリ語法——昭和51年度言語研修スワヒリ語テキスト 1』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1976年。
- (7) 但し, 「主格」とする点は首肯でき難い。
- (8) 尾上圭介, 「提題論の遺産」, 『言語』, 大修館, vol. 6, no. 6, 20頁, 1977年。
- (9) 同書, 21頁。
- (10) 同書, 21—22頁。
- (11) 同書, 22—23頁。
- (12) 同書, 同頁。
- (13) 同書, 同頁。但し, 草野は後に, 「仮文主」に「総主」として特別の地位を与え, 「離隔文主」は単なる独立詞として退ける立場をとる (『国語の特有せる語法——総主』, 『帝国文学』, 五巻五, 1899年) ことになる (尾上, 同書同頁)。即ち, 「は」という助詞の存在を総主の資格の絶対条件と考えるようになるのであるが, このために視野を後退縮小させる結果になっている。
- (14) 尾上, 前掲書, 22頁。
- (15) 同書, 同頁。
- (16) 同書, 24—26頁。
- (17) この copula 論は, スワヒリ語で copula と考えられている 'ni' がかなり自在に取捨されるように見える現象と重ねて考えることが出来る面もあろう。
- (18) 尾上, 前掲書, 24—25頁。この視点を参考にしてスワヒリ語を再考すれば, 従来目的語の頭置として片付けられて来た構文に「提題論」を拡大する視点が得られるのではないか。

例えば, “Nina kitabu” (私は本を持っている。) の目的語 kitabu (本) を頭置した文章は, “Kitabu ninacho.” という具合に, 所屬辞 (possessive) の ‘-na’ に「物」の単数クラス (バンツ一語の第7部類) である kitabu のクラス接頭辞 ‘ki-’ と一致させた関係詞 ‘-o-’ の定形 ‘-cho’ を付けて作る。更に, 「目的」に於ても, 所屬辞 ‘-a’ の一致によらず, 目的語を二分する現象も見られる。上記の視点は, これらの言語現象の背後にある論理を考究する上で参考となろう。

- (19) 尾上, 前掲書, 24—25頁。
- (20) 同書, 25—26頁。
- (21) 同書, 同頁。
- (22) 同書, 同頁。
- (23) 註(4)参照。
- (24) 守野, 前掲書, 5頁。
- (25) ソースは, 小説, 聖書, 文法書, 『スワヒリ語基礎語彙用例集』(註(4)参照), 中の用例, 及び東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の昭和51年度スワヒリ語研修(7.14—9.4)とその後継続している月例研究会などでインフォマントから直接得た文例で, いわゆる「海岸スワヒリ語」である。
- (26) ndi-R R は, 守野に従って, 関係詞‘-o’の一致形を, ndi-R は, Rを用いた等辞の強意形を表わす。
- (27) ndi-R は, 勿論厳密な一致をすることが多いが, 抽象度の高い観念を示し得るNクラスに一致させた ndiyo で代替されることも決して少なくない。
- (28) 守野庸雄, 1975年, 21頁。
- (29) 三上章, 『象は鼻が長い』, くろしお出版, 1960年。同, 『三上章論文集』, くろしお出版, 1975年。その他多数。
- (30) 尾上, 前掲書, 28—29頁。
- (31) 同書, 29頁。
- (32) 守野, 前掲書, 57頁。但し, 「動詞原形」ではなく, 「動詞不定形」とする方が適わしいと考える。
- (33) 2), 22), 42), 48)など「名前構文」とでも呼ぶことのできる文例群については, 興味深い発見をできたものと思うが, 具体的には稿を改めて論じたいと考えている。今, 結論だけを簡単に紹介する。例えば, “Mimi jina langu Ali.”と言う文例は「Tembo 構文」であるが, 他方, “Jina langu mimi Ali.”の文例は, 実際には異質の構文と見るべきではないだろうか。その区別の理由は, 総主と主語の「全体・部分関係」によると言うよりは, むしろ所有代名詞の性格と用法に関わる統語上の差異に基づくと考えられる。(Ⅴ-(9)参照)。
- (34) 守野, 前掲書, 12頁。
- (35) 尾上, 前掲書, 23頁。

《付記》 この論稿は, 昭和53年度東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所公募共同研究員として, 同研究所助教授守野庸雄氏と行なった共同研究プロジェクト「スワヒリ語の構文と統語法の研究」の成果の一部をノートに纏めたものである。幾分なりともスワヒリ語研究に資する所があるとすれば, 全て守野氏の御指導に負っている。尚本文中の誤まりは一切筆者による。

(筆者の住所: 国立市東2の4 院生寮)